

島原市の沿革

城下町としての島原の歴史は、有馬氏の後に、島原藩主として入封した松倉氏が、拠点を有馬(南島原市)から島原に移し、元和4年(1618)から7年3箇月の歳月をかけて島原城を築城した時から始まり、以来、島原半島の政治、経済、教育文化の中枢的地位と役割を果たしてきました。その間、寛永14年(1637)には、「島原の乱」が起こり、寛政4年(1792)には、「島原大変肥後迷惑」といわれる大災害に見舞われました。

この2つの大きな動乱と地変を経て、明治4年(1871)廃藩置県により、島原藩は島原県となった後、同年11月に長崎県に統合され、明治11年(1878)、旧城下町は島原村、島原町、湊町となり、大正13年(1924)4月にその三町村が合併して島原町となりました。

昭和15年(1940)4月1日には、安中村、杉谷村と合併して、長崎県下で3番目、全国で15番目の市として市制を施行し、昭和30年(1955)4月、三会村と合併。その後、平成18年1月1日に有明町と合併し、現在に至っています。一方、旧有明町は、大野村、三之沢村、東空閑村、湯江村に分かれています。明治22年4月、大野村、三之沢村、東空閑村が合併して大三東村となり、昭和30年4月1日、大三東村と湯江村が合併して有明村となり、昭和36年11月3日、有明町として町制を施行後、平成18年1月1日の合併により島原市となりました。

また、平成2年(1990)11月17日には、雲仙普賢岳が噴火し、平成3年6月3日に発生した噴火災害では、43名もの尊い人命が奪われるとともに、平成8年6月の終息宣言までの長きにわたり、多数の家屋や土地が被災するなど、苦難の時を歩みました。しかしながら、国県の支援や全国から寄せられたお見舞いや義援金、市民をはじめ多くの方々の努力により、復興を果たし、今日に至っています。

市長メッセージ／市勢要覧発行にあたって

島原市では、本市の将来像である「有明海にひらく湧水あふれる火山と歴史の田園都市島原」の実現に向け、「思い」を「かたち」にするべく、魅力あるまちづくりを進めてまいります。

このたび、市内外の多くの方々に島原市の魅力を発信し、「島原市をもっと知りたい」「訪れてみたい」「住んでみたい」という思いを馳せていただきたいと願い、「島原市市勢要覧」を作成いたしました。

この市勢要覧では、「島原市まち・ひと・しごと創生総合戦略」において、島原市のブランドイメージとして位置付けられている「湧水」を中心に本市で暮らす「ひと」にスポットを当て、本市で活躍する市民の皆様の写真を数多く使わせていただきました。

生き生きと活躍する市民の姿や現在進めている施策をご覧いただき、本市の魅力発見や本市を紹介していただくツールとして、様々な場面でご活用いただければ幸いに存じます。

平成三十年三月

島原市長 古川 隆三郎

